

## スーパー・メガリージョン構想検討会（第4回）議事概要

- 1 日 時 平成29年12月22日（金）14:00～16:00
- 2 場 所 中央合同庁舎2号館 講堂
- 3 出席委員 奥野顧問、家田座長、井口委員、大野委員、小林委員、坂田委員、真田委員、藤原委員、森川委員、八木委員、山名委員代理 小川氏

### 4 議事

- (1) 開会
- (2) 議事

ア 奈良県 荒井正吾知事より、資料3「スーパー・メガリージョンとリニア中央新幹線が国土形成に与える影響を地方の視点で考える」について発表があった。以下、主な質疑（次項以下、同じ）。

- ・関西の場合、大阪のリニア終着駅とそれぞれの地域が広域的にどう結節するかが大事だと考えるが、その効果をより引き出すために何が必要か。

（荒井知事）大都市の発展と地方の発展を高速鉄道でうまく結べないかという発想が大事である。その場合、大都市圏内の交通体系の充実が、大都市を居心地良くするためには、まず重要。次に、都市住民とリフレッシュできる場所とを結びつける必要があり、都市の生活に森や村のような要素を組み入れるべき。そのため、高速交通ネットワークを用いることで、都市と田園を結びつけて、都市住民が元気になる国土形成の発想を提唱したい。

- ・けいはんな学研都市について、これまで民間主導でやってきているが、いよいよ成長期に入ったように思われる。リニアとの結節効果をどう考えるか。

（荒井知事）けいはんなの課題は、研究者間の結びつきが弱いことであり、高速交通ネットワークで研究機能の充実が期待できるような性格のものではない。リニアで、けいはんなを発展させるということではなく、研究の集積、結び合わせこそが重要だということを強調しておきたい。

- ・リニアの効果を地方に波及させるためには、単に交通のアクセス性を高めるだけでなく、国の構造、価値観として、大都市と地方それぞれの多様な生き方を認める社会にならなければならない。今、地方分権が盛んに言われているが、行政事務を移しているだけで、考え方は国が一元管理しているように思う。この点についてどう考えているか。

（荒井知事）国に限らず、民間事業者も含めて、組織としては色々な人を集めてはいるものの、うまく使い切れていない印象がある。まず、人の育成や働き方改革など、日本でどうしていくかという戦略があって、その上で、その実行と容易化のために交通移動の円滑化や、結節性の活用を考えていくことが大事である。日本では、形を尊しとする一方、異質なものを尊しとしない傾向が強いように思うが、同質なもの同士が肩を寄せ合うのではなく、交流があることで異質なものが入って新しい価値を生むようになるのではないか。そういう機会の創出が大切であると思う。

- ・多様性の中での交流の拡大が重要でそこから新しいものが生まれると考えている。交流によって社会が均質化してしまっただけでは元も子もない。地域の独自性をどう維持・発展させていくべきか、知見を伺いたい。

（荒井知事）ある人の存在が、ある地域では異質であるが、他の地域では合う、ということはある。異質なものをどこかに温存する場所はぜひ必要であるし、異質なものを受け入れる場所があるという懐の深い社会は、交流の必要性和結びつくものと考えている。単に交通ネットワークを高度化するだけではなく、異質なものを受け入れる気持ちがないと交流の意味が生まれない。

- ・明治・昭和・平成の大合併を経て基礎自治体の数が少なくなった。結果的に基礎自治体が大きくなって、地域のことを自分たちで考える人が少なくなっていると危惧される中で、資料3の中で「奈良県モデル」と表現されている県が担う中間的な役割について伺いたい。

（荒井知事）中間的な役割、サッカーで言うところの「ミッドフィルダー」の役割としてまず大事なことは、市町村への市町村別のエビデンスの提示であり、そこから、それぞれの地域が差異の原因を探ることであると来てきた。健康寿命、医療費の現状、教育のパフォーマンスなどを提示し、そのエビデンスをもとに何をすべきか地域ごとに考え始めても

らうようにしている。

- ・奈良の位置を考えた場合、北側に東海道線がある。新幹線が敷設されたことで経済開発がさらに進んだ東海道線に対して、交通が不便な奈良には、結果として奈良本来の良さが今でも温存されているのではないか。これは奈良以南の紀伊半島全体についても言えることであるが、そこにリニアの結節点が置かれることに関して、所見を伺いたい。

(荒井知事) 歴史的に見れば、奈良は日本の歴史の中で国際性が一番高かった。仏教や漢字さらには律令制度など、古来、奈良は、海外から多くのものを受け入れてきたが、すべてを受け入れたのではなく生活規範など残すべきものは残してきた。国際社会に向かう際の日本の知恵として、温存すべき価値が何かを自覚しないといけないのではないか。

地勢的に見れば、内陸地であり自然災害が少ないこと、京奈和自動車道の延伸などによって、奈良県の工場立地件数は全国7位と伸びている。異質なものをどう受け入れるのか、森をどうするのか、都市と村をどう結び付けるのかという思想をもって社会資本投資を行うことで、奈良の発展の道筋を見い出せたらと考えている。

イ (株)電通 電通若者研究部 奈木れい研究員から、10~20代の若者の価値観の実態について、発表があった。

- ・大学教員として学生を見ていると、ネットの使われ方などコミュニケーションの取り方が大きく変わっていることを実感する。これは、東京圏固有の現象ととらえるべきか。また、従来、若者を市場の対象としてきた企業にとって、今のこの世代は魅力がなく、購買層を50~60代にシフトしているように聞く。この市場動向をどう考えるか。

(奈木研究員) 背景となった調査毎に対象地域は異なるので、地方と東京の学生がそれぞれ同じ価値観のもとにあるかどうかは追加的に調べる余地があるが、感覚知で言えば、デバイスさえあればアクセスできる情報量は変わらない時代であり、経済格差を踏まえずに言えば10~20年後にはその落差は無くなっていくのではないか。一方、実際に体験することは場所に依存することから、都心に集まる流れは残っているのではないか。

若者に市場性がないと判断するのは、時期尚早と考える。若者に売れるものが作られていないのではないか。ターゲットとなる人たちの考えていることが見えていない状態で、昔からあるロジックやメソッドでビジネスをやっていることはあり得る。

- ・家族が大好きなことや、周りとの協調する気質が強いことは、都会志向や地元志向など場所との関係に影響していくのではないか。

(奈木研究員) 地元志向の背景には、間違いなく家族や友達などの集まりとの関係がある。自身が不安に陥ったとき、揺るぎのない存在である家族との結びつきが強くなる。さらに、シェアハウスなど家族の定義が、必ずしも血縁関係のある地元に残らない緩やかさをもってきていることも注目される。重要なのは、若者へのアピールとして、リニアが何のために使えるのかを共有すること。例えば好きな人たちと住みながら都市でも仕事ができる、さらに地元でも仕事ができるような自己実現ができる地域を目指し、インフラや環境を自治体等地域が取り組んで実現していくことが必要と考える。

- ・リニアが開業する10~20年先を見据え、世界の若者のトレンドについて伺いたい。私の大学は2/3が留学生であり、発言、興味の持ち方、前向きな姿勢など日本人学生とはパフォーマンスが全く違っている。留学する日本人も減っており、世界との関係性が弱まることでは、その揺り戻しがきくと来ると考えるが、この点について伺いたい。

(奈木研究員) 揺り戻しは色々来ると考えている。世界にはミレニアルズというトレンドがある。日本のゆとり世代よりも幅広い世代であるが大枠は似ており、家族のまとまりがあり、生き方のゆるやかさに特徴的がある。今の若者は必ずしも高級ブランドにこだわらず、別の選択肢を見出す緩やかさがあり、ある種の価値観の転換が起こっているのは確かである。将来の若者像について、定職に就いてお金があれば良いというものだけでなく、より柔軟に楽しく生きていけたら良いという価値観によって、選択肢の幅をもっていくような感触である。

ウ 国土交通省 築政務官より、検討会における活発な議論に対して謝辞があった。

エ 事務局より、次回について、1月19日の開催が周知された後、閉会となった。

以上